

# Vol.6 もう一人のアドルフ・ロース

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペー等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

## もとの文脈にもどる必要性

ウィーンの建築家アドルフ・ロース(1870-1933)。新聞に建築と文化時評のコラムを連載し、当時の帝都ウィーンの保守的な建築界と、因習が支配する世情を糾弾する文章を、多く残している。だから彼は、建築のみならず、他の文化領域においても、専門家たちのダーリンだ。でも不幸なことに、『装飾と犯罪』という文章の表題が一人歩きして、その本意とは裏腹にロースは、近代主義の文脈に取り込まれてしまった。それが破産した今日も、ロースの出番が減るようには見えない。

ロースに関してはもう、一通りのことは語り尽くされている。だから、オリジナルを踏まえて自論を展開するというよりも、インタージャンルな評論者の見解を下敷きにした、連想とひらめき(?)に満ちた新しい解釈が、少なくない。

ここでたとえば、ある専門家がロースに付け加えた解釈の割合を20%と設定しよう。それを弟子たちが、5%で三代繰り返すと、解釈記述の割合が、全体の三割近くになる。論が論を呼び、言説の洪水。

それに与するのは筆者の本意ではないが、必要悪とでも言うべきか。広大だが浅いのが洪水の特徴、道しるべとして、棹を差すことにしよう。

## 建築空間と「被覆」

ロースの文章で、『装飾と犯罪』(1910年)に並んでよく引用されるのが、『被覆の原理』(1898年)だ。ロース自身が出典はゴットフリート・ゼムパーだと言及している(本誌連載Vol.2からVol.4参照)。

ここでロースの提示する、「絨毯」と「骨組み」の構図だが、これはゼムパーの被覆の論理にほかならない。『様式論』にはさらに、次のようにある:「この空間囲いを支え、荷っている構材なるものは、空間及び空間区画とは、直接何の関係もない、ただの必需品

に過ぎない。さらに、「石・煉瓦、等で築かれた厚壁でも同じである。それは被覆を支えた木柱の構造と同様に、空間概念とは関係がなく、……囲いの支持物としてのみ存しているもの、本来の目的とは別のもの…」なのだ。

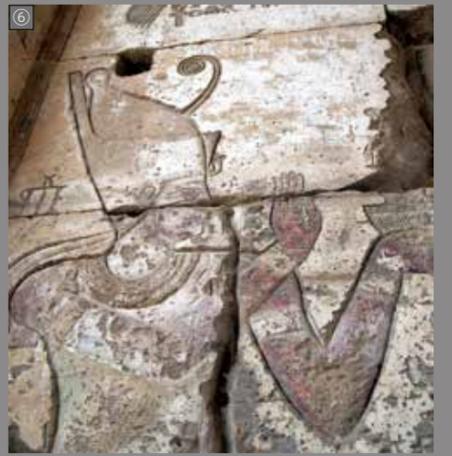
ここでの「絨毯」は、初源的な技術を用いて制作された、空間を隔するのに適する面材、と理解するのが適切だ。この「空間を囲う」という行為にゼムパーは、「建築的空間」の生成を認識する。ここで、「建築は屋根からでは?」と訝る人もいよう。しかし屋根は、単なる建物の一部に過ぎなく、空間を旨とする建築ではない。囲いを工夫して視線をコントロールすること。空間に精神的な深度を与える操作の効用は、宗教建築に顕著にみられる。日本の大社に、お賽銭箱の向こうの御簾、その奥の板戸で閉ざされた間に、四方を几帳で囲んだ降臨の座が、しつらえてあること、ご存知だろう。

## ロースとゼムパーの「彩色」

ロースは被覆に関して、「被覆された素材を、被覆するそれと混同する可能性、それはいかなる事情があろうとも、排除されるべきだ。」という根本原理を提示する。そして卑近な例として、木を別の木に模して塗ることを、断罪する。

この、色を付けるという作業だが、ギリシャ神殿の「彩色」を巡って19世紀、大論争だった。「彩色派」だった若きゼムパーは、その実証に貢献するが、「彩色」それ自体は、謎に止まっていた。白いままでも、高い完成度を示すギリシャ建築。しかし、「彩色」を経て初めて、完璧な芸術作品となった。それを論証しようと、ゼムパーは『様式論』に着手する。そのキーとなった概念が、「被覆」に他ならない。

ゼムパーはいう。メソポタミアやエジプトなど、ギリシャ以前に繁栄した古代文明においては、素材の特性や構造などの制限的要因に阻まれて、造形が未分化に止まったが、



ギリシャの様式は、それらの要素を「有機的」に統合し、装飾と構造が不可分な芸術に高めた。そして「彩色」は、「最後の被覆」として、決定的な役割を果たしたのだ。

しかし、この諸要素が溶け合っただけで一体となった様相は、ギリシャを絶対の価値とする建築家ゼムパーの19世紀的限界だった。ロースはここで、「待った」を入れる。

## ロースの「被覆」と素材

ロースは、素材に味方する。「絨毯は(壁として吊られても)ただ、絨毯のままでありたいのだ。」と。ゼムパーに従えば、壁の絨毯は「材料変換の原理」に倣って、構造壁の表面に痕跡を残して消え去る運命にあるのだが、ロースは素材に、そのままの姿で存在することを承認する。

この、素材のオーラを造形に活かすことは、古代からの伝統でも、もちろんゼムパーも心得ていた。ただ、様式の建築家たる彼は、ギリシャ建築を究めることを、使命としたのだ。それに対してロースは、ゼムパーが論の過程で定義する、前提また傍証とも呼ぶべきものに、注目しようとする。

これはロースの、大きな功績だ。手慰みに墮した装飾を廃して、素材に空間の主役を

与え、古代の、構造と装飾との葛藤が造形となっている、それに近代への可能性を見たロース。それと同時に、彼は古典建築を、そのまま普遍的価値として受け入れた。ロースハウスの基壇部は、これで解りやすくなる。誤解は承知の確信犯、そういう人だったのだ。素材であれ被覆であれ、この時期のロースの労働とコストとイミテーションに関する言説は、現代にも有効な手がかりが詰まっている。

## ロースのエピソード

そういうロースも、実生活では、うまく「素材」と対処できなかった。今日風説が、飛び交っているようだから、いくつか原典を踏まえて、お伝えしておこう。安直な善悪ではなく、全人的理解のために。

### <リナ(最初の妻)の回顧録より>

カフェ。樺材のプレーンな煙草入れを、褒め称えるロース。その口調にうっとりとする私。「この箱、開けるの難しいんだ。貴女にはきっと無理だな。」思わず意地がくすぐられて手に取るが、力余って小箱はバラバラ。当惑する私。「どう償ったらいいでしょう、おっしゃって。」ロースは間をおいて、「償うって、本気で言ってるの?」真剣な表情。怒っていない!「もちろんですわ。」ホッと私。「じゃあ、

僕と結婚していただきたい!」何のためらいもなく「はい!」、と答えた。姉は、いい冗談だと笑い転げた。19歳の、ある春の日のおはなし。その夏に私たちは結婚した(1902年)。

<リナへの手紙から(1904年)> 「…君は、愛が去ったことを、秘めておいてくれた。本当は君が一番、苦しんだはずなのに…。…感謝の気持ちを、どう表わせばいいのだろう。君のおかげで、定住するアパートがある。永遠に叶わないと思っていたんだよ、僕は金銭面で意志が弱いから。…本質を見抜く君の審美眼、先見の明と確かな判断力、僕の支えだった。難局で勇気づけ、僕の仕事を通用するものに鍛えてくれた。…」(筆者注記:「リナは(結婚しても)ただ、リナのままでありたかったのだ」が、ロースはお人形扱ひした。1905年離婚。)

<晩年のロースと三人の少女> 2014年、ウィーンのあるアパートを整理中に、ロースの「女兒わいせつ行為事件」裁判の、行方不明だった記録と調書が見つかった。調書によると、ロースの犯行は明らかだが、施主で政治家の敏腕弁護士グスタフ・ショイが、司法とメディア作戦を展開。懲役四カ月執行猶予の判決を受けたが、入獄はしなかった。(オーストリアの雑誌報道より)

(続く)



① いわゆるロース・ハウス基壇部:アルヒトラフと側壁との取り合いディテールの解決に、ロースは一年を費やした  
② 京道上賀茂神社の帷(とぼり)  
③ 木の木目塗装例、ポスコビッツ・アパートNo.2 1927年アドルフ・ロース  
④ 木製パネル補完例、ポスコビッツ・アパートNo.2 (アパートNo.1 から内装移設)、1927年アドルフ・ロース:パネル割リズムの変更、左がマホガニーのオリジナル、右が樺の補完部  
⑤ エジプト、ヒビス神殿:パピルスの柱頭に梁受の石を搭載、ゼムパーのいう未分化性  
⑥ エジプト、ヒビス神殿:目を無視したレリーフが、下地塗りと彩色の存在を傍証する  
⑦ リナ・ロースの回顧録「題名をもたない本」

出典:①②③④筆者撮影 ⑤⑥ウィキメディア・コモンズ ⑦筆者アーカイブ